

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	丸 田 健 太 郎
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目 「自分のことば」を育む国語教育の研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	難 波	博 孝
審査委員	教 授	松 本	仁 志
審査委員	教 授	間 瀬	茂 夫
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、国語教育を対象とし、「自分のことば」という観点から、他者との関係の中で現れる学習者の個を捉えようとする国語教育の構想を検討したものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、国語教育、日本語教育、継承語・バイリンガル教育における「母語」という概念がどのように用いられているのか整理を行なった。まず、国語教育では「母語」という概念は学習者を「日本語母語話者」「非日本語母語話者」とラベリングする一つの要素として用いられていることが明らかとなった。このような「母語」認識では、学習者を同質化し、その言語的な多様性を捉えることができないという課題が生じる。また、日本語教育ではその教育目標が日本語母語話者の日本語能力を基準に設定されていることから、母語話者主義から抜け出すことができていないことを指摘した。継承語・バイリンガル教育では、「母語」という概念によって学習者の出自が説明され、現在の学習者の言語的背景を捉えることができていないという課題を明らかにした。</p> <p>第2章では、第1章で述べた、見えない「母語」の当事者の語りを取り上げ、その課題を考察した。本研究では、SODA当事者である筆者の語りを中心に、SODA同士の対話やSODAとCODAの対話をナラティブ分析した。これにより、見えない「母語」の当事者が抱える課題を明らかにするとともに、筆者が固有に持つ手話とアイデンティティの課題について考察することができた。</p> <p>ナラティブ分析の結果、見えない「母語」の当事者である筆者らは、社会からのメタメッセージなどを受け取ることで、他者に自己の経験を語ることに阻害されており、自身のアイデンティティ形成に課題を生じさせていたことが明らかとなった。一方、見えない「母語」はその当事者のアイデンティティを語る際に欠かすことのできないものであることも確認した。本研究では、このような、見えない「母語」の存在を証明するとともに、言語教育の対象として位置付けることの必要性を考察した。</p> <p>第3章では、見えない「母語」の設定から他者に自己が認められる要件を探るため、承</p>			

認論を理論的枠組みとし、見えない「母語」の当事者のアイデンティティ形成を考察した。また、筆者が大学生を対象に行なった実験授業の結果から、従来の「母語」概念に代わる〈学習者の母語〉概念を提出した。これにより、従来の学問規定に基づく「母語」の捉えを脱却し、学習者の言語生活から言語的側面を捉え直す視座の提案を行なうことができた。ここでは、ゴッフマンのアイデンティティ論を参照することにより、〈学習者の母語〉という視座が学習者の個を捉えるために有効であることを示した。

さらに、国語教育の対象として「言語」「母語」〈学習者の母語〉を再度検討し、学習者のことばは他者との関わりの中で対象化されることを明らかにした。まず、「言語」や「母語」という捉え方では、学習者が同質化され、従来の学問規定の問題から抜け出すことができないことを述べた。また、〈学習者の母語〉という視座の有効性を指摘しつつ、その概念から学習者の言語的側面を捉えようとした際に生じる、「言語」の枠組みの問題から離脱することができないという課題を示した。

第4章では、第3章で提出した「自分のことば」が紡がれる過程を明らかにするため、筆者が実践した国語科の授業を分析した。また、児童が「他者のことば」を引き受け、「自分のことば」を生み出し、さらに他の児童に「他者のことば」としてどのように引き受けられるのか考察するため、児童Aを抽出児童として選定し、考察を加えた。

児童Aの分析では、普段の学校生活の中で自身の衝動的な行為を自制することができない様子が、この実践では少なかったことに着目した。この児童は、教材の中で忌み嫌われる存在として描かれた登場人物と自己を重ね合わせることで、作品に対する読みを深め、自分なりの意見を表現することができていた。このような他者との出会いが、他の児童への語りかけに「自分のことば」として表れ、学級という社会集団の一員として授業に参画する意識をもたらすに至ったことを述べた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 国語教育、日本語教育、継承語教育・バイリンガル教育の領域における学会誌を分析し、従来の「母語」概念の整理を行なったことが挙げられる。これにより、それぞれの言語教育領域が前提としてきた「母語」の捉えを整理し、その差異を考察することができた。
2. 見えない「母語」話者の語りを分析することを通し、本研究では「言語」「母語」に代わる〈学習者の母語〉という概念、さらに「自分のことば」という概念を提示した。この概念を使い、見えない「母語」話者のアイデンティティ形成がどのような社会的要因から阻害され、また、対話によってアイデンティティが形成されていったのか考察した。
3. 授業の分析を通して、児童が他者との交流の中でどのような過程をたどり、自己を変容させたのかを見とるために、詳細な質的考察を行った。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 5年 2月 9日